

2023 年度 ベトナム研修 報告書

医療科学部 放射線技術学科 3 回生 氏名 澤井 瑠菜

研修概要

2024 年 2 月 25 日から 3 月 6 日の 11 日間でチョーライ病院とフエ医科薬科大学附属病院で研修を受け、タンアン病院を見学しました。病院研修・見学に加え、診療放射線技師の方々、フエ医科薬科大学の学生と交流し、有意義かつ貴重な経験を積むことができました。

研修参加の目的

私は消極的な性格を改善するため、本研修に参加しました。

大学 2 年生の時、本学でアラスカの学生と交流する機会がありました。その際、アラスカの学生は文法を気にせず片言の日本語で母国のことを良く話してくれました。私は日本に関する知識が少ないことに加えて文法の正確性が気になり、思うように英語で会話できませんでした。これは自分の無知と失敗を恐れる心が原因であると考え、このような自分を変えたいと切実に思うようになりました。しかし、目的を達成するための具体的な手段がわからず生産性のない日々を過ごしていました。ベトナム研修のことを知り、異国の地で失敗を恐れず、何事にも積極的かつ意欲的に取り組む力をつけたいと思い、本研修へ参加する決断に至りました。

チョーライ病院における実習での学び

チョーライ病院には毎日多くの患者さんが来院し、院内の廊下や待合室から溢れるほど混雑していました。CT の検査数は日本よりも非常に多く、1 日 400 件を超えます。このように多忙な状況でも、担当してくださった診療放射線技師の方は 3D イメージの作成方法や先天性疾患の CT 画像所見について教えてくださいました。多忙な中、十分な対応ができないことを気にしていただき、相手への気遣いや優しさを忘れない対応に感銘を受けました。時間的・精神的に余裕がない状況でも相手のことを考えられる診療放射線技師になりたいと思いました。この経験から、常に言動で自分の気持ちや考えを表現し、誠意を相手に伝えることの素晴らしさを学びました。

限られた時間で多くの検査数を安全に実施するには工夫が必要です。チョーライ病院では検査の回転率を上げるために患者さんが自身でポジショニングしていましたが、一定の安全性は確保されていました。これは患者さんに検査への理解があるために成立していると考えます。このことから、検査の安全性を確保するためには患者さんに検査への理解を促し、検査に協力してもらうことが非常に大切であると学びました。



▲ 模擬血管による静脈ルート確保の練習

来年度は静脈ルートの取り方に関する講義や実技があるため、診療放射線技師の方に練習方法を伺いました。ガドリニウム造影剤を注入する際に使用するチューブを血管と見立てて静脈ルートの取り方を練習することに加え、何度もイメージトレーニングしたとおっしゃっていました。診療放射線技師になってから患者さんに苦痛なく静脈ルートの確保が行えるように学生の間にも何度も練習し、就職後に活かしたいです。

フエ医科薬科大学附属病院での研修

フエ医科薬科大学附属病院では臨床実習中の学生が診療放射線技師と遜色なく診療業務を遂行しており、その姿は学生とは思いませんでした。さらに、彼らは私たちよりも遥かに多くの知識を持っていました。実践的な取り組みにより、知識が定着しやすいのだと思いました。実際に、私も一般撮影のポジショニングや撮影準備を何度も手伝わせていただき、教科書で覚えた知識を身に付けるには非常に良い反復練習になると感じました。普段の学習では知識を実践的に用いる機会が乏しいため、診療放射線技師として知識を活用して現場で働くイメージを持って学ぶ必要があると思いました。

フエ医科薬科大学附属病院も非常に多くの患者さんがおられ、一般撮影室も検査が立て込んでいました。そのような状況でありながら、フエ医科薬科大学の学生が X 線撮影の準備を手伝ってくれました。患者さん呼び込む際に次の検査内容を教えてもらい、自身で考えて X 線管球を適切な場所に配置しました。配置を間違えたこともありましたが、検査が円滑に進み、同僚みたいとフエ医科薬科大学の学生が言ってくれて非常に嬉しかったです。より多くの知識をつけて誰かの役に立てる診療放射線技師になりたいと思いました。自分の行為を認められることは充足感や向上心につながるということがわかり、私も人を褒められるようになりたいと思いました。



▲ 一般撮影のポジショニング

ベトナムの学生との交流

本研修では、チョーライ病院で臨床実習していたホーチミン医科薬科大学の学生やフエ医科薬科大学の学生と交流する機会がありました。日本の臨床実習とは異なり、ベトナムではポジショニング、装置の操作、静脈ルートの確保など、より実践的な実習を日常的に行っていました。そのため、臨床実習中の学生が検査の目的や手順を考えて行動していることに驚嘆しました。ホーチミン医科薬科大学の学生は検査の準備や患者対応している場合を除き、常に診療放射線技師の近くに座り、疑問を抱いた時にはすぐに質問していました。その積極性や情熱に内気な私は尊敬の念を抱かずにはいられませんでした。自らチャンスを掴み、自らを成長させる彼らの姿勢を見て、私が目標とする全モダリティを使い熟す診療放射線技師になるために積極的に行動し、自己成長を促進させたいと思いました。

フエ医科薬科大学の学生との交流の一環として、放射線画像検査における安全性の確保を題材にグループディスカッションしました。ベトナムの学生は多くの意見を述べていましたが、私は意見が思いつかず、ほとんど発言できませんでした。ベトナムの学生は日頃から頸椎損傷疑い時の頸椎側面撮影の安全確保方法など、実際の検査例を基にした議論を重ねており、その差が出たことを実感しました。自分の意見を持ち、相手に伝えることはリスクアセスメントや会議に必要な能力です。常に書籍や新聞から情報を取得し、豊かな表現と知見を深め、自分の意見を持った魅力ある社会人になるために努力したいと思いました。



▲ グループディスカッションの様子

総括

本研修を通して、主体的に質問や相手に話しかけることができるようになりました。しかし、未だに周囲の目を気にしてしまい、衆人環視の中で積極的に意見を述べることや質問することには不安があります。今後は友人間で意見交換や質問をすることで人目を気にする性格を克服したいです。そして、自己成長には主体的な行動や失敗から得る学びが大切であることがわかりました。自分の可能性を広げるために様々なことに挑戦したいです。

謝辞

最後に本研修を企画し、引率して下さった京都医療科学大学の松尾悟教授、水田正芳教授、霜村康平講師、石田翔太助教に深く御礼申し上げます。並びに、このような素晴らしい機会を提供して下さった国立チョーライ病院、タンアン病院、フエ医科薬科大学の皆様、本研修をご支援して下さった皆様に厚く御礼申し上げます。



▲ チョーライ病院のスタッフとの集合写真



▲ フエ医科薬科大学の学生との集合写真